

事例7:切れ目のない支援について ～児童発達支援センターと放課後等デイサービスの連携～

発表テーマ:利用者家族ニーズ／地域との連携

事業所名:明石市立あおぞら園・きらきら(指定管理:社会福祉法人三田谷治療教育院)

担当者:相談支援専門員 小坂田 博美

施設・事業所紹介

障害のある方や家族から、生活等に関してお困り事などを相談いただき、よりよい地域支援を送るためには、どうしたらいいかを一緒に考え、必要に応じて支援を行い、安心した地域生活が送れるようサポートしていきます。

【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

児童発達支援センターを卒園し、放課後等デイサービス利用のお子様において、新環境への戸惑いや不安から不適応行動につながり、事業所利用が難しくなる状況がありました。

相談支援専門員として、事業所への情報提供や環境の観察等も行いましたが、解決にはつながらず、児童発達支援センターと放課後等デイサービスの連携に取り組むこととなりました。

2 具体的な取組内容

- 児童発達支援センター園長と児童発達支援センター児童発達管理責任者に状況の相談を実施しました。
- 卒園後のフォローアップとして、放課後等デイサービスの事業所に児童発達管理責任者と相談支援専門員が伺い、本人の状況の観察や本人の特性についての情報提供を行いました。また、実際に本人と児童発達管理責任者が関わっている場面をみていただくこととなりました。
- 今まで好きだったおもちゃや、本人が得意なおもちゃも持参し、期間を決めて貸し出す取り組みも行いました。

3 成果と評価

本人は児童発達管理責任者を見て、少し驚く様子もあったが、すぐに状況を理解し一緒に遊び始めました。好きなおもちゃと、今まで一緒に過ごしてきた先生の登場に、とても落ち着いて、笑顔で一緒に遊ぶことができました。また、その様子を事業所のスタッフだけでなく、他の利用児もとても暖かい眼差しで、見守ってくれるといった状況でした。その後、事業所が本人の特性に合った環境設定や関わりを積み重ねていただいた結果、不適応行動も徐々に減り、現在は仲のいい友達もできて、とても楽しい放課後を過ごしています。



事例8:実習・ボランティア・トライやるの受け入れ

発表テーマ:職員採用

事業所名:明石市立あおぞら園・きらきら(指定管理:社会福祉法人三田谷治療教育院)

担当者:保育士 泉川 桂子

施設・事業所紹介

- 児童発達支援センター:あおぞら園(定員:30名)
- 児童発達支援事業:きらきら(定員:50名)
- 相談支援事業:そよかぜ
- 保育所等訪問支援事業:ぽけっと

【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

- 実習に来る学生の中には、実習で初めて障害のある子どもと関わるという学生もいます。実習が始まる時にはとても緊張した様子であるが、実習が終わる時には「実習が楽しかった」「子どもたちがかわいかった」「こういう施設で働きたい」という感想を持つ実習生もあり、実習を通して、仕事の魅力を伝えることができていると感じています。
- 現在働いている職員(保育士)にこの職業に就いたきっかけを聞くと「実習に行くまでは保育園や幼稚園での就職しか考えていなかったが、実習で施設実習に行き、働きたいと思った」「学生の時にボランティアで障害のある子と関わったことがあったから」という職員がいました。「保育科」に進む学生は保育園や幼稚園での就職を希望している人が多く、福祉施設への就職が選択肢にない人が多いのが実態です。実習やボランティアをきっかけに就職先の選択肢になることを感じました。

2 具体的な取組内容

以下のような取組を実施しました。

- 実習の受け入れを積極的に行う。
- 実習後も行事や通常療育などのボランティアに来てもらえるように実習生にボランティア登録を勧めている。
- ボランティア登録の学生に、行事などの際にボランティア募集の呼びかけを行う。
- 実習生以外のボランティアも積極的に受け入れる。
- トライやるウィークの受け入れを行う。



3 成果と評価

- 園での実習をきっかけに就職した職員がいます。仕事内容や職場の雰囲気を知り、就職を希望してくれました。採用側としても実習の様子を通して、人柄を知ることができ、採用の判断となりました。
- 継続して実習を受け入れている大学の先生から就職希望の紹介がありました。大学側にも園の雰囲気や仕事の内容など知っていただいていることで紹介してもらえることがあります。同じ出身大学の職員を通して、職員募集について問い合わせがあったりすることもありました。
- 行事の際、ボランティア登録している学生に呼びかけると、来てくれた学生がいます。特別支援学校に就職希望の学生が定期的にボランティアに来たり、実習に来た学生がボランティアに行きたいと希望してくれることもありました。
- トライやるウィークで来た中学生が福祉の仕事に興味を持ってくれたり、ボランティアに来てくれたりしました。小さい時にきょうだいがあおぞら園に通っていて興味を持っていた中学生がトライやるを希望する場合があります。トライやるを通して、将来の職業選択につながったり、日々のきょうだいとの関わりに繋がったりすることがあると考えています。



4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

- 継続して実習・ボランティア・トライやるを受け入れていき、福祉の仕事の魅力を伝えていきたいです。
- 直接就職につながらないとしても、地域の保育園や幼稚園で働いた時に子どもへの支援に繋がると考えています。
- より一層ホームページの充実や広報活動に取り組み、福祉の魅力を発信したり、園の様子を伝えたりしていきたいと考えています。

事例9:ARTSHIP2022に初参加

発表テーマ:利用者生き生き支援

事業所名:明石市立ゆりかご園(指定管理:社会福祉法人三田谷治療教育院)

担当者:児童発達支援管理責任者 徳岡 優子

施設・事業所紹介

令和4年度より明石市から社会福祉法人三田谷治療教育院に運営がかわり、新たなゆりかご園としてスタートしました。身体に障害や発達に遅れがある就学前の子どもたちが通園する施設です。現在45名の通園児が親子での登園や通園バスに乗って単独で登園されています。通園以外でも外来でのリハビリも実施しており、就学前から22歳までの方が利用されています。



【取組内容について】

1 取組を行ったきっかけ

お子様の自己選択・自己決定を大切にし、自分で選び決めたことで自由に表現する場があることでお子様の自己肯定感を高めていきたいと常日頃感じています。

たくさんの可能性を秘めたお子様の力が存分に発揮され、その可能性を多くの方に見ていただきたいと思い、障害のある方の豊かな表現活動と、アートを通じたユニバーサル社会の実現を目指す ARTSHIP2022で作品展示を行いました。

2 具体的な取組内容

画用紙、絵の具の色などはお子様が自ら選択したもので取り組みました。どの画用紙を使うか、どの色を使うかは視線や顔の向き、手を伸ばす、言葉などそれぞれの表出方法で伝えてくれました。

書き始める位置も自ら選択し、そこまでは職員と一緒に筆を持っていきます。そこからは自分の力で筆を振り下ろしキャンバスを彩ります。また、筆や画材だけでなく、手や足につけた絵の具の感触を楽しみながら自分の身体の動きを使い画用紙やキャンバスを彩っていきます。手に握ったクレパスを左右に大きく動かし、画用紙いっぱいに虹のように彩っていく。それぞれ表現方法も様々であり、職員や保護者が決めた描き方ではなく自由に表現してもらいました。



3 成果と評価

お子様が自己選択・自己決定をして取り組むことで、誰かにさせられているのではなく自発的に取り組むという経験ができ、達成感を感じられたように思います。取り組んでいることに対して「もっと〇〇して」「こうしたらよかったのに」といった否定的な言葉かけをせずに、ありのままの作品が素晴らしいと伝えたことでお子様に「このままでいいんだ」という自己肯定感を感じてもらえたように思います。



4 今後の課題、他の施設・事業所へのアドバイスなど

お子様が自分の可能性を最大限に発揮し多くの方に見てもらえる機会はまだ少ないように思います。自分で選び取り組んだことが形となって現れることで、お子様だけでなく家族の方にとっても可能性を信じることに繋がればと思います。今後も自己選択・自己決定を大切にし、自己実現ができる社会へ向けてゆりかご園でも取り組んでいきたいと考えています。